

どの道でも先達として大きな背中を

日本平和委員会代表理事 石川 康宏

畑田重夫先生が亡くなられた。直接お会いする機会を得たのは、二度だけであった。一度目は2014年6月28日のこと。同日の全国革新懇の総会で先生は代表世話人を退かれた。直前の会合の際に「おつかれさまでした」と初めて声をかけさせていただくと「カラダは元気なんだけど耳が悪くなつてね、討論の時に人の声がうまく聞き取れなくなつてしまった」と、そんなことを何かとても楽しい話でもしているかのようによさしい笑顔で語ってくれた。

もう一度は2020年2月1日の夜に行なわれた、日本平和委員会70周年記念レセプションでのことだった。東京へ向かう新幹線の中で、たくさんの方の先輩が書いた記念冊子の中に短いスピーチのヒントを探し、結局、会場で紹介させていたのだいたいは「旗は高く、旗竿は深く」という畑田先生の言葉

だった。運動は意気軒昂で毅然としたものでなければならず、もちろん社会に正確な指針を示すものでなければならぬ。同時に、そうあるためにも運動は市民の中に深く、広く根を下ろして信頼されるものとならねばならない。そういう意味かと受け取った。

ただ、この時、先生はたくさんの方のスピーチをひとつずつ楽しまれているようには見えなかった。マイクを通した声を聞き取ることの困難が、さらに増していたのかも知れない。

レセプションで、畑田先生は少し長めのスピーチをされた。準備した原稿を両手で持ち、平和運動の長い歴史を実体験もまじえてふりかえりながら、未来を拓く指針を示そうとされるものだった。6年前とは違って、少し厳しい表情をされていたが、やさしい笑顔と目に力のこもった真剣な表情と、どちらもが畑田先生の豊かな人柄のあらわれだったのだろう。お酒の入ったくだけた場でのことだったが、先生のスピーチに拍手を送りつつ、襟を正させられる思いがしたのを覚えている。

畑田先生の著作にふれたのは、おそらく1976年が最初だった。『情勢をとらえる』（水曜社、1975年）。大学1年生の春休み、多くの先輩が実家に戻ることもなく、学内で様々な活動をつづけていた。それをさして気に留めることもなく、ぼくは札幌への帰り支度を進めていた。さあ帰ろうというその時に、ある先輩が「しっかり勉強してこい」と渡して

くれたのがこの本だった。立命館大学産業社会学部の自治会BOXでのことだったと思う。

日米安保条約というものが、この国のあり方をじつに大きく左右している。そのことをまとめて学ぶ初めての機会となった。他にも少なくない本を持ち帰ったが、この春休みの学習をきっかけに、ほくは学生運動にのめり込んでいくことになる。人生の転換を促してくれた、思い出深い一冊である。

数ある著書の中から、もう一つあげたいのは『働く者の学習法』（東邦出版社、1967年）、『国民のための学習法』（東邦出版社、1980年）など一連の「学習」に関する本だった。色の違う何種類かのボールペンを活用し、本に書き込みをするといった具体的なハウツーとともに、何のために学ぶのか、また個人の営みにとどまらず労働者が階級として学ぶ運動をもたねばならない理由はどこにあるのかといった根本問題が、労働者教育運動に身を投じた自身の選択の評価もふくめて書かれていた。世の中にはそうした生き方もあるものか。知的な世界への憧れをもち、学問と社会運動を自分なりにどう結びつけるかと考え始めていたばかりにとって、それは大きな刺激となるものだった。

その後、ひどくまわり道の多い、遅々とした歩みの末にようやく大学教員となったのは、ただちに労働者教育運動の門をたたいた。1995年4月のことである。さらに時をへて、2013年に全国革新懇、2017年に日本平和委員会

のそれぞれ役員にくわえていただいたが、気がつけばいずれの道にあっても、畑田先生が先達として大きな背中を見せておられた。

若い頃から、ずっと先生の生き方を意識してきたというわけではない。人生のそれぞれの局面に、多くを学ばせてもらえる様々な先輩との幸運な出会いがあった。だが、大学を定年退職するこの年になって、学問と社会運動の統一に関する自分なりの模索の道をふりかえれば、そのはるか先に、意識しようとしまいとつねに畑田先生がおられたわけである。不思議なめぐりあわせともいえようが、今後の自分を激励するために、いくらかでも必然に導かれてのことだったと思っておくことにしたい。

「旗は高く、旗竿は深く」。自信をもって、いつでも誤ることなく旗を高くかかげるために必要な集団的学習と研究の体制は十分だろうか。多くの市民とともに、多くの市民に支えられて歩むための草の根の取り組みに、さらなる工夫の余地はないだろうか。この言葉を、個人としても日本平和委員会という組織としても、毎日の生活と活動を点検する大切な精神の一つとして活かしていきたい。

畑田重夫先生、長いあいだ、おつかれさまでした。